C 年特定15　ルカ12章49―56節

［直訳］

49「火を　私は来た　投げるために　地の上へ
そして　何を　私は望む、
もし　すでに　それが燃やされていたら。

50だが、洗礼を　私は持つ　洗礼されることを、
そして　どれほど　私は圧迫されているか、
ときまで　それが完成される。

51あなたがたは思っているのか　次のことを、
平和を　私はやって来た　与えるために　地において
そうではない、　私は言う　あなたがたに、
むしろ　裂け目を。

52なぜなら、あるだろう　今から　五人が　一つの家において　裂かれて、
三人が　二人に対して、
そして　二人が　三人に対して、

53裂かれるだろう　父が　息子に対して、
そして　息子が　父に対して、
母が　娘に対して、
そして　娘が　母に対して、
しゅうとめが　彼女の嫁に対して、
そして　嫁が　しゅうとめに対して。」

54だが彼は言っていた　群衆にも、
「ときは　あなたがたが見る　雲が　出るのを　西に、
すぐに　あなたがたは言う　次のことを　『にわか雨が　来る』、
そして　それは起こる　そのように。

55そして　ときは　南風が　吹いているのを、
あなたがたは言う　次のことを　『暑さが　来る』、
そして　それは起こる。

56偽善者たち、面を　地の　そして　空の　あなたがたは知っている　見極めることを、
だが、この時を　どうして　あなたがたは知っていない　見極めることを。」

［新共同訳］

49「わたしが来たのは、地上に火を投ずるためである。その火が既に燃えていたらと、どんなに願っていることか。50 しかし、わたしには受けねばならない洗礼がある。それが終わるまで、わたしはどんなに苦しむことだろう。51 あなたがたは、わたしが地上に平和をもたらすために来たと思うのか。そうではない。言っておくが、むしろ分裂だ。52 今から後、一つの家に五人いるならば、三人は二人と、二人は三人と対立して分かれるからである。

53　父は子と、子は父と、
　母は娘と、娘は母と、
　しゅうとめは嫁と、嫁はしゅうとめと、
　対立して分かれる。」
54　イエスはまた群衆にも言われた。「あなたがたは、雲が西に出るのを見るとすぐに、『にわか雨になる』と言う。実際そのとおりになる。55　また、南風が吹いているのを見ると、『暑くなる』と言う。事実そうなる。56　偽善者よ、このように空や地の模様を見分けることは知っているのに、どうして今の時を見分けることを知らないのか。」

①構成

ⓐ 49 節と 50 節と 51 節の次の文章は、文頭に置いた目的語を強調する文章であるが、文型そのものが同じである。

49　火を　私は来た　投げるために　地の上へ
50　洗礼を　私は持つ　洗礼されることを
51　平和を　私はやって来た　与えるために　地において

語順は「目的語＋一人称の動詞＋不定法＋（前置詞句）」であり、まったく同一である。しかも、50 節は「だが」で始まり、51 節は修辞的な疑問文で始まっており、次のように段落分けすることができる。

㋐ 49 節。文頭に置かれて強調された「火」が何を指すのかが問題になる。51 節二行目とそっくり同じ文型が使われていることから考えると、「平和」と言い換えられるようなものが指されており、まずは「信仰の火」と考えられる。

㋑ 50 節。動詞「洗礼する」は同じ語根の名詞「洗礼」を取り、「洗礼を洗礼する」という表現になるが、意味は「洗礼をほどこす」である。ここでは受動態が使われ（神的受動形）、神がほどこす洗礼であることがほのめかされている。

㋒ 51―53 節。イエスが来たのは、「平和」ではなく、「裂け目」を与えるためだと述べ、ミカ書からの引用を行っている。

ⓑ 49―53 節はイエスが弟子たちに語った言葉であるが、54―56 節は群衆に向けられている。54 節と 55 節には「あなたがたが見るときは…言う…それは起こる」という同じ構文が用いられている。この対応から 54―56 節は二つの段落に分けることができる。

㋐ 54―55 節。雲が出るのを見るとき、南風が吹いているのを見るとき、それが示していることをあなたがたは読み取ることができる。

㋑ 56 節。前半では地や空に現れている状況を見極めることを「あなたがたは知っている」と述べ、後半では同じ動詞の否定形「あなたがたは知っていない」を用いて、「この時」を見ようとしない者たちの偽善性が指摘されている。

②火を投げるために来た（49 節）

ⓐ 49 節に「投げるために私は来た」とあり、51 節に「与えるために私はやって来た」とあるように、49―53 節ではイエスが地上に来た目的を述べている。イエスは地上に火をもたらすために来た。しかしその火はイエスの意図に反して、分裂を生み出すもととなってしまう。「私は来た」は終末に来るメシアを表す表現。

ⓑ「火」。原文では冒頭に置かれ強調されている。旧約聖書は「火」の役割を「清める力」（レビ一三52、民三一23）、「分別・識別する力」（エレ二三29、イザ三三14）、「裁きの力」（創一九24、出九24）として示している。ここでの意味はいずれも可能であり、「敵対や分裂を生じさせる燃えるような熱意」の意味も考えられている。

Ⓒ「そして何を…、もし…」。ヘブライ語の疑問詞「何」は感嘆詞（「なんて」）にもなり、「もし」は目的節を導入する接続詞にもなりうる（特に、驚きや感情を表わす動詞のあとで）。従って、この句がヘブライ語の影響を受けているなら、「すでに燃されていることをどんなに望んでいるか」の意味になる。この他に「もしそれが既に燃えているなら、どんなに私は嬉しいだろう・私はそれ以上何を望むだろう」と訳すことも可能。

ⓓイエスの足を涙でぬぐった「罪深い女」に、イエスは「あなたの信仰があなたを救った。平和において（安心して）行きなさい」と言って彼女を励まし（七50）、七十二人の弟子を派遣するときには、家に入れば真っ先に「この家に平和があるように」と告げなさいと指示している（一〇5）。このことから考えれば、イエスが来たのは「平和」をもたらすためであるはずである。しかし51節では、「地に平和を与えるために私はやって来たと思っているのか」と述べており、イエスの普段の発言とは矛盾しているとも思える。

ⓔしかし確かにイエスは、平和をもたらすために来た。イエスはすでに「火」が燃えていたらよかったと語っている。そうであれば、この燃えるべき「火」はまずは裁きの火ではなく、「信仰の火」であり、真の平和をもたらす火にほかならない。しかし、その意図とはまったく反対に、この火は「裂け目」を作り出してしまう。それはイエスを受け入れる側に問題があるからである。人々は神から遠く離れているが、自分では神の側に立っていると思い込んでいる。そのような者にとって、イエスの言葉は耳障りでしかなく、聞くにあたいしない言葉と映る。こうして人々は自信たっぷりに、神の言葉を拒絶することになる。

③イエスが受ける洗礼（50節）

ⓐ神から離れているのに、それに気づこうとせず、神の言葉を告げるイエスに聞き従わない人々は、そのような態度を取ることによって、神と彼らとの間の裂け目を暴露しているが、この裂け目は人間同士の裂け目でもある。なぜなら、神を媒介としない交わりは、偽りの平和にすぎず、いずれ裂け目は明らかになるからである。

ⓑ裂け目を指摘するイエスは、人々の自信に満ちた圧迫を受けることになる。この圧迫の極みが十字架という「洗礼」である。この節の「洗礼される」と「完成される」は、どちらも受動形であり、神が動作の主体であることを婉曲的に示す受動形（神的受動形）だと思われる。そうであれば、イエスの十字架を完成させるのは神であり、そこには神の意思が働いている。イエスの運ぶ火は清めの火でもある。

Ⓒ50節「洗礼」。儀式としての洗礼の意味であれば、イエスはそれをすでに洗礼者ヨハネから受けているので、その意味ではない。ここでは「洗礼」は「十字架に至る苦難、十字架上の死」を指している（マコ一〇38・39参照）。しかもこの苦難は、マコ10章45節では「人の子は…多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのである」と述べられているから、人々の罪を贖うための苦しみである。

ⓓ「洗礼すなわち十字架の死が完成されるときまで、私はどれほど圧迫されているか」と述べることによって、イエスは死を覚悟しており、イエスの死は人類を救おうとする神の意思の成就だということが言い表されている。

④顕在化する裂け目（51―53節）

ⓐ51節の「やって来た」は、49節の「来た」とは別の動詞。「来る・到着する」を意味するが、ある場合には「手助けのために来る」の意味にもなり（2テモ四16）、ここでもこの意味合いを含むかもしれない。「裂け目」と訳した語は「分裂・不一致」を意味し、この語の動詞形「裂く」が52・53節に用いられている。並行箇所マタイ10章34節は「裂け目」ではなく、比喩的に「剣」を用いている。

ⓑ52節の「今から」はルカによく使われる表現。救いが新たな段階に入ったことを示す。52節は53節の引用（ミカ七6）の説明。53節の「母」と「しゅうとめ」が同一人物なら、登場するのは「五人」となる。

Ⓒ平和の火をもたらそうとするイエスを圧迫し、十字架へと追い込むところに、人間のゆがんだ姿が浮き彫りとなる。従って、イエスがもたらそうとした平和の火は、結果的には、頑なな人々のゆがみをあぶりだす光となってしまう。イエスが来たからゆがみや裂け目が生じたのではない。人々が気づかなかっただけで、裂け目は初めから、神と人の間に、そして人と人の間にあったのである。イエスの到来は神から離れた人間の姿を明らかにし、各自が自己を中心にして生きていることを暴露する。それをイエスはミカ7章6節からの引用によって示す。この家族間の対立は、真の光であるイエスによって照らし出された各人のゆがみである。

ⓓ平和の火をともそうとしたことが、迫害を招くということは、昔から預言者が経験したことである。エレミヤは神の言葉に出会ったとき、それを喜んでむさぼり食べた（エレ一五16）。しかしその神の言葉を語るがゆえに、人々から「恥とそしり」を受ける（エレ二〇7―9）。それは神に完全にとらえられた者の苦しみであり、その同じ苦しみをイエスは味わっている。

⑤時を見極めることを知らない（54―56節）

ⓐ人々は自然が知らせる予兆には目を留め、毎日の生活に生かしているが、「この時（今の時）」を見分けることを知らない。「どうして知らないのか」というイエスの言葉には、「知っているはずだ」という非難が込められている。彼らは時のしるしを見分けることが「できない」というよりは、「しない」と言うべきかもしれない。イエスは彼らを「偽善者」と呼んでいるからである。

⑥神と人との裂け目をつなぐ

ⓐイエスは平和をもたらす信仰の火を「投げるために」地上に来た。しかし、人々のゆがみのゆえに、この火は「清めのための裁きの火」として機能することになり、神と人との間の、また人々の間の裂け目を顕在化させてしまう。イエスは、十字架という「洗礼」によって、この裂け目を身に背負い、神と人の間に平和をもたらす。イエスの十字架は神と人との裂け目を解消するただ一つの架け橋である。イエスが裂け目を明らかにするのは、架け橋がどこにあるかを示すためであり、真の平和の源泉を明らかにするためである。

ⓑイエスに目を向けるなら、「神の国が近づいた」という決定的な「時」が来ていることに気づくはずである。イエスは多くの病人を癒し、悪霊を追い出し、死者を蘇生させて、神の力が人々の間に働いていることを示した。イエスが起こす数々の奇跡は「しるし」であり、目に見えない神の力を見させるものである。しかし、人々はイエスの奇跡を見ても、その「しるし」が指し示す意味を読み取ろうとしない。神へと目を向けようとしないのは、人々のゆがみがあるからである。偽善者たちはやがてイエスを拒絶することになる。イエスは「どうして」と述べて、見るべきものを見ることのできない愚かな偽善者にならないようにと警告する。